

全学共通教育科目『地域の理解』授業運営改善の検証

五 條 小枝子・馬 本 勉

はじめに

本科目は、2005年度の本学開学時に、県立3大学統合を象徴する科目として新設されたが、2015年度からの全学共通教育のカリキュラム改革に先行して、2013年度から、学生の主体的能動的な学修の修得を促すために、フィールドワークを柱とした授業設計に変更した。2013年度から2015年度までの授業改善の検討内容については、既にまとめた^(注1)。本稿では、主として、それ以降、2016年度、2017年度の検証に基づく改善とその成果について報告しておきたい^(注2)。

本科目の目標と授業設計改訂の趣旨

本項では、本科目の目標と授業改善の趣旨について、再度、簡単に確認しておくことにする。

本科目は、地域に関する基礎知識を身につけ、物事に主体的に向き合う姿勢を培うことを目標としている。

改訂の趣旨は、次の2点に集約される。「第1には、本科目を、本学の掲げる教育目標『主体的に考え、行動し、地域社会で活躍できる実践的力のある人材を育成する』の実現のための基盤教育科目の一つと位置づけ、地域社会の実態を肌で感じ取る機会を与えることで、学生自身による地域の問題の把握や課題の発見を促すことである。第2には、それによって、専門科目においても基盤となる『物事に主体的に向き合う姿勢』を培うことを目指すことである」^(注3)。

その実現のために、学生は、以下のプログラムに参画する。

- (1) 地域の特性や課題について、様々な観点からの知見を得る。
- (2) 地域の生の実態を自分の力で観察し、課題を発見し、その解決策を模索する。
- (3) フィールドワークで得られた情報や発見をグループ内で共有し、それを成果としてまとめ、発表する。

グループワークでは、他者の意見を理解し、視野を拡げ、最終的に発表をまとめるための協働作業を行うことで、「地域」への「理解」を深化させ、定着化を図ることができると考えられる。

受講生の動向

ここで、受講生の動向を確認するために、過去3年間のフィールドワーク先別の参加人数の推移を掲げておく(表1)。フィールドワークの受け入れ先の都合で、それぞれ参加人数には上限がある。年度により、多少の変動はあるが、直近の数値を【 】で示した。

表1 「地域の理解」フィールドワーク先別参加者数の推移

講義テーマ・フィールドワーク先	【】	2015年度	2016年度	2017年度
中国山地のたたら製鉄業(山県郡安芸太田町)	6	12(広4・庄2・三6)※	3(広1・庄2)	3(三3)
広島伝統芸能「神楽」(安芸高田市)	—	90(広64・庄8・三18)※	33(広18・庄7・三8)	10(広9・三1)
筆は道具なり(安芸郡熊野町)	20	26(広19・庄6・三1)	20(広18・三2)	13(広8・庄4・三1)
地域の暮らしを豊かにしたい～NPOの視点から～(広島市)	15	26(広18・庄3・三5)	5(庄1・三4)	12(広6・庄2・三4)
ヒロシマを考える(広島市平和公園他)	10	28(広20・庄2・三6)※	12(広6・三6)	4(広3・三1)
広島離島で高齢化の課題に対応する地域住民活動(江田島市)	8	14(広7・三7)	12(三12)	0
広島県の農業と中山間地域(三次市)	15	10(広2・庄7・三1)	—	—
広島県の畜産の歴史(庄原市)	15	25(広15・庄9・三1)	—	—
広島県の農業と畜産の歴史(庄原市)	15	—	14(広2・庄7・三5)	4(広2・庄1・三1)
ひろしまの英学:庄原英学校を中心に(庄原市)	30	12(広6・庄4・三2)	2(庄2)	—
中山間地域の自治体活動(安芸高田市役所)	10	—	7(広5・三2)	0
中山間地域に暮らす高齢者と専門職から見た地域(総領町)	10	—	9(広1・三8)	3(三3)
広島の地域資源:天然記念物の樹木の保全と活用(庄原市)	7	—	—	6(広1・庄5)
地域資源の発見から住民の手によるまちづくり(府中市)	—	—	—	4(広1・三3)
受講者総数		243(広155・庄41・三47)	117(広51・庄19・三47)	59(広30・庄13・三16)

注: 広島キャンパスは「広」、庄原キャンパスは「庄」、三原キャンパスは「三」と略称する。

直近の参加者数上限は、【】欄に示す。

フィールドワークの設定がないものは、「-」で示す。

※ 希望者多数のため、2回に分けて実施。人数は、総計。

本科目の単位認定には、講義への出席と毎回の感想カードの提出、フィールドワークへの参加、グループワーク・相互評価を含む合同発表会への参画、レポート提出(前半、後半の講義内容から地域を選択して作成、2回、フィールドワークに出かけた地域に関するもの1回、計3回)を必要とする。合同発表会は、後期の定期試験終了後に、3キャンパスの学生が広島キャンパスに集合して開催するため、終日を充てることになる。

参考に、2017年度の本科目の講義内容を掲げてみる。

表2 2017年度「地域の理解」プログラム

授業タイトル	担当者	フィールドワーク先(所在地等)
①イントロダクション	五條小枝子:総合教育センター 鈴木 康之:人間文化学部国際文化学科	
②イントロダクション	和田 崇:経営情報学部経営学科	
③広島県の伝統芸能「神楽」	築地 昭二:安芸高田市文化財保護審議会委員	神楽門前湯治村(安芸高田市美土里町) 実施日:2017年10月15日(土)
④ヒロシマを考える	宇吹 暁:前広島女学院大学教授	広島平和記念公園他 実施日:2017年10月21日(土)
⑤広島離島で高齢化の課題に対応する地域住民活動	手島 洋:保健福祉学部人間福祉学科	ふれあいいきいきサロン「笑福亭」・移動販売「一光」(江田島市) 実施日:2017年10月28日(土)
⑥地域資源の発見から住民の手によるまちづくり	吉田 倫子:保健福祉学部人間福祉学科	石州街道出口地区(府中市) 実施日:2017年11月18日(土)
⑦広島から世界へ～筆は道具なり～	高本 光:白鳳堂取締役統括部長	白鳳堂本社および筆の里工房(安芸郡熊野町) 実施日:2017年11月22日(水)
⑧中山間地域に暮らす高齢者と専門職から見た地域	岡田 麻里:保健福祉学部看護学科	庄原市総領自治振興センター(庄原市総領町下領家) 実施日:2017年11月22日(水)
⑨広島の地域資源:天然記念物の樹木の保全と活用	萩田信二郎:生命環境学部生命科学科	庄原市役所および近隣 実施日:2017年12月3日(日)
⑩地域の暮らしを豊かにしたい～NPOの視点から～	竹内 瞳:ひろしま市民活動ネットワーク HERAT to HEART 事務局長	東観音台連合会〈と〜かんカフェ〉(広島市佐伯区東観音台) 実施日:2017年12月3日(日)
⑪県北にみる中山間地域の課題	上水流久彦:地域連携センター	三次市役所 実施日:2018年1月12日(金)
⑫中国山地のたたら製鉄業史	野原 建一:広島県立大学名誉教授	太田川上流域(山県郡安芸太田町 他) 実施日:2017年10月21日(土)
⑬広島県の農業と畜産の歴史	村田和賀代:生命環境学部生命科学科	広島県立総合技術研究所畜産技術センター(庄原市七塚原) 実施日:2017年12月25日(月)
⑭合同発表会に向けて	五條小枝子:総合教育センター	グループワーク等作業日
⑮合同発表会		2018年2月6日(火) 広島キャンパスにおいて実施

このように、フィールドワーク1回の参加を組み込んでいても、講義は、14回実施し、15回目を合同発表会としているため、実質的に関わる授業時間は、他の科目より多い。学生にとって、かなり負荷の重いプログラムであるため、例年、受講前に、十分に注意を喚起しているが、表1に示したとおり、受講生数の変動は、激しい。ちなみに、表に示していない年度の受講生数は、2018年度も含めて、以下のとおりである。

2013年度 53名（広島キャンパス44名・庄原キャンパス9名）

2014年度 60名（広島キャンパス57名・庄原キャンパス3名）

2018年度 137名（広島キャンパス86名・庄原キャンパス9名・三原キャンパス42名）

2015年度には、受講生が激増し、フィールドワークを一日に2回、あるいは二日にわたって実施していただくよう無理をお願いしたプログラムもあったが、捌ききれず最終的には、抽選でフィールドワーク先を割り振らざるを得なくなった。それに対して、2017年度には、フィールドワークの受け入れ先と調整して具体的な活動を準備していただいたにも関わらず、希望者がおらず、結果的に実施できなかったプログラムもあった。このように、受講生の動向は予測しがたい。そのため、「学生による授業評価」の追加質問として、受講の理由について問うことにしてみた（後述）。

問題点の抽出と改善策

本項では、過年度の実践を通して明らかになった問題点とそれへの対応についてまとめておきたい。

(1) フィールドワーク参画に際しての当事者意識の不足

例年、フィールドワーク担当者から、フィールドワーク先での不注意な行動や、積極的な質問をせず他人任せと受け取られかねない態度をとる等の当事者意識の欠如を指摘されるため、フィールドワーク参画の心得や意義に関する講義を2回に増やすとともに、授業開始前に、掲示で、本科目の目的とプログラム内容を周知させた。初回のオリエンテーションでも、本科目の目標とそれを達成するための授業設計について、より意識させるよう説明を加えた。

(2) グループワークの活性化

本学は、それぞれ80km程度離れた3キャンパス4学部を擁するため、キャンパスを超えた意思疎通、協働作業がもともと困難な状況にある。それに加え、受講生数が多い年度には、学生の希望に基づくフィールドワーク先への振り分けの調整が難しく、また、1グループの人数も増やさざるを得ず、グループ内で十分な調査や議論に基づく作業を行うことがより困難となった。そのような事態を避けるために、前項に述べた本科目の目標や授業設計、履修上の心構えについての理解を促す働きかけに加え、合同発表会の形式を、グループの代表者によるプレゼンテーションのみから、グループ全員が関われるようにポスターセッション形式に改めた。

合同発表会の構成は、次のとおりとした。

午前 I グループ代表者によるプレゼンテーション

グループの発表内容のアピールポイント

午後 II ポスターセッション（第1部・第2部）

第1部と第2部とで、グループ内の発表担当と質問担当とが交代する。

グループ内での情報共有を図るため、「ポスターセッション質疑応答記録シート」を準備し、交代時に引き継ぎさせた。振り返りのグループワークのための基礎資料でもある。

Ⅲ 発表の振り返りのためのグループワーク

Ⅳ グループワークを経て、個人で、「振り返りレポート」(図1)を作成する。

「振り返りレポート」では、振り返りとともに、どのグループのポスター発表が優れていたのか、理由を付して、ランキング欄に記入する。

学生による相互評価のポイントは事前の授業で提示し、どのような発表内容が求められるのかを理解できるようにした。また、当日も会場に掲示し、評価ポイントを意識させた。

図1 振り返りレポート様式

振り返りレポート様式 (事前準備を含む)

< 裏面 >

フィールドワーク先:	
グループ番号:	学籍番号: 氏名:
Ⅰ プレゼンテーション	
自分の考える <input type="checkbox"/> アピールポイント <input type="checkbox"/> 発表内容 等についての説明 および 十分に準備し、その 成果を活かしたか について	
Ⅱ ポスターセッション	
<input type="checkbox"/> 質問事項: 他グループからの質問 <input type="checkbox"/> 評価された点 <input type="checkbox"/> 反省点 等について 項目別に記入	

※ 裏面にも記入欄あり

Ⅱ ポスターセッション (続)	
今回の発表で、自分が優れていると思ったグループ(内容が興味深い、新しい発見がある、提言がすばらしい、新たな知識を得られたなど)をランキングしてみよう。	
フィールドワーク先 グループ名	上位に選んだ理由
☆ 第1位 ☆	
☆ 第2位 ☆	
☆ 第3位 ☆	

このような構成にすることにより、学生がすべてのプログラムに関与でき、グループワークの成果の定着化と他の地域への理解の深化とが期待できる。

「振り返りレポート」の記述からは、学生が、ポスターセッションまでの間の協働作業の進め方の成否や、ポスター発表における質疑応答から、自らの考えの至らなかった点や、事前・事後調査の不十分さ、フィールドワーク先での情報収集の不足等を自覚させられている姿が看取できる。これらの詳細については、次項で検討する。

(3) レポート評価の均質化と明確化

本科目は、オムニバス形式のため、レポート評価は、それぞれ担当者が単独で行う。レポート評価の均質化と明確化を図るため、学生に予め示した「レポート自己チェックシート」(図2)を、評価担当者にも参考資料として示した。

本シートは、当初、表現形式的な項目が多かったが、2017年度から、記載事項をより内容に踏み込んだものに変え、レポートの質の向上を図っている。

(4) 「学生による授業評価」自由記述欄に質問を追加

授業改善の効果を検証し、あるいは、履修登録の動向を予測する資料とするため、2016年度から、以下の質問事項を追加した。

- ① 本科目を受講しようと思った理由
- ② 本科目を受講して、学び得たもの、また、発見したものがあれば、それは、どのようなものか。
- ③ 本科目を受講して、自分は変わったと思うか。それは、どんな変化か。

「学生による授業評価」は、合同発表会後に実施する。「振り返りレポート」の作成に加えて求められる自由記述に、どの程度記載してくれるのか懸念されたが、予想に反して、学生はかなり熱心に記入してくれる。

ここで、追加質問①「本科目受講の理由」についての学生の回答を年度別に示しておく(グラフ内の数値は%)。

グラフ1 2016年度「受講の理由」

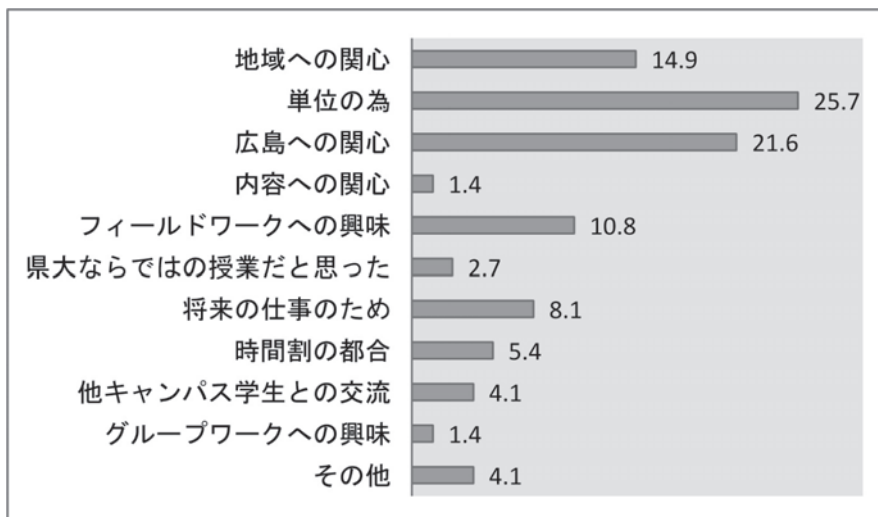
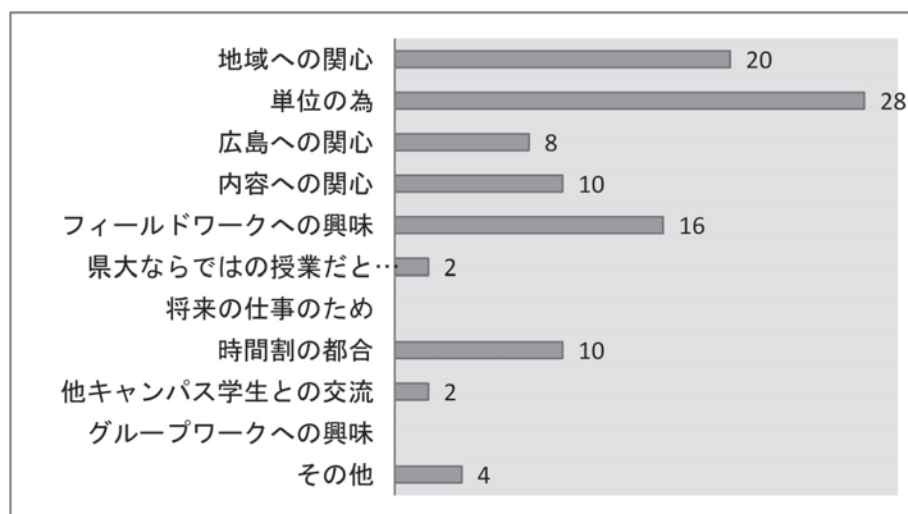


図2 レポート自己チェックシート

レポート自己チェックシート		評価ポイント
チェック項目(3段階評価)		評価ポイント
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 評価ポイントの目安 3 十分できている 2 やらうとしたが、やや不十分である 1 まだ改善の余地がある </div>		
1. 調査・分析・考察・課題の発見		
1-1	当該地域に関して、十分な調査・情報収集を行っている。	
1-2	収集した情報を的確に分析している。	
1-3	情報と分析とをふまえて考察している。	
1-4	地域の課題を発見できている。	
1-5	発見した課題に対して、分析・考察を基に解決策を模索している。	
2. 課題条件・構成		
2-1	与えられた課題条件に対応している(テーマ分量・書式など)。	
2-2	冒頭に序論の段落を書き、テーマにどのような観点で取り組むのかを明らかにしている。 [論点(問い)の設定]	
2-3	最後で結論の段落を書き、本論で何を言いたかったのかを簡潔にまとめている。 [意見(答え)の明示]	
2-4	段落と段落が論理的につながっている(論の流れが整理されている)。	
3. 本論の妥当性・情報の提示		
3-1	自分の考えと他者の意見を明確に区別して書いている(引用をしていない)。	
3-2	自分の考えや主張を述べるとき、適切な根拠や具体例を用いている。	
3-3	必要な正しい情報が示されている。	
3-4	参考文献が適切に提示されている。	
4. 最終レポート		
4-1	フィールドワークで得た情報と地域の課題が提示されている。	
4-2	現地で発見した課題と情報収集で得られた分析・考察が示され、整理されている。	
4-3	独自の視点で、課題解決を試みている。	

グラフ2 2017年度「受講の理由」



先述のとおり、受講生数が極端に異なるため、単純な比較は控えなければならないが、両年度とも、受講理由として「地域」・「広島」への関心、「フィールドワーク」への興味、「他キャンパス学生との交流」等の授業設計にかかわるものが半数以上を占めている（2016年度54.2%、2017年度56%）。一方、「単位の為」・「時間割の都合」といった科目の内容に関わらない理由は、2016年度31.1%、2017年度38%である。2年間の範囲で捉えれば、年度による差は見られない。したがって、現時点では、年度による受講生数の変動の原因は、不明とせざるを得ず、継続的な調査が必要とされる。

ただ、受講生の半数が「地域」への関心を受講の理由として挙げていることや、ごく少数ではあるが、「県立広島大学ならではの授業」だと思い受講している学生もいることから、広島県という地域への関心をかなりの学生が抱いているということはいえるのではないだろうか。

改善の成果と今後の課題

本項では、「振り返りレポート」や「学生による授業評価」の自由記述欄から、学生自身が考える成果と課題とを整理し、それを踏まえた上で、新たな成果や今後の課題についてまとめておきたい。

○学部キャンパスを超えた協働作業について

- ・それぞれうまく役割分担し、プレゼン・ポスターセッションに向けて準備できた。
- ・事前にグループメンバーとプレゼンの内容について議論を交わし、シンプルかつまとまりのあるようにパワーポイントの準備を進めた。
- ・十分な時間はとれなかったが、学部・キャンパスを超えたメンバーでこの発表会に臨めたことがよかった。
- ・他キャンパスの人と交流できるよい機会であったし、広島県には様々な伝統文化や特色があるということを改めて知ることができた。また、どの伝統文化にも後継者問題があるのだと気付いた。

上記の意見のようにグループ内で、円滑に分担作業を進め、それを統合できたグループもある一方、以下のような意見もあった。

- ・グループの発表といっても一人だけに負担のかかっているところがあった。
- ・作業の分担をしたが、それぞれの中だけに情報を留めてしまっていた。グループの中での情報共有をもっとしておくべきだった。
- ・フィールドワークのグループワークが他キャンパスと違ったから、発表の準備が大変だった。

3キャンパスの距離は、学生たちの協働作業にとって大きな壁であることは間違いない。グループ内での負担の不均衡も、直接的な相談ができない状況では、そう簡単に解消できるものでもない。学生の様子を見ていると、必ずしも全員が積極的に参加しているというわけではなく、あまり熱心でない学生がいるのも確かである。自身の関わり方によって、達成感も充実感も、また「地域」への「理解」の深度も向き合い方も格段に違ってくるということを、学生にどう納得させるかの方策も必要であろう。

○新しい発見について

- ・フィールドワークで、もっと様々な視点から調査すべきだったと感じた。また、フィールドワーク先の方がとても丁寧に説明してくださり、それを受け身で聞いてしまうことが多かったので、広い視野と多くのことに疑問をもつ姿勢が大事だったなと思った。
 - ・質問されたことに答えられたとしても相手にうまく伝わっていないこともあり、説明する力がまだまだ足りないということを実感した。自分が考えていたことはまだ浅い考えで、考えが足りないと思ったし、学生らしい視点からの考えがもっとあればよかったと思う。さらに、振り返りのグループワークで、自分にも新たな疑問がいくつか生まれたのでそれについて、調べてみたり、考えてみたりして、自分の考えを深めていきたいと思った。
 - ・ポスターセッションでは、自分たちが実際に行き感じた事をもとに課題に対する提案をしたので、見学をさせていただいたからこそその実感の伴った発表ができた。
 - ・質問を多く受けたのでよかった。質問に答えることはしっかりと自分の考えと知識を使う必要があるので、大変だったが、しっかりと考えをまとめ、対応できたのは良い経験になった。
- これらの意見は、ポスターセッションでの、質問や発表により、自らの姿勢の至らない点や調査・考察の不十分さに気づかされたり、フィールドワークの意義を再確認したりしているものである。
- ・色々な人がいて、色々な歴史があって、それが重なって今の広島があるのだ、全てつながっているのだということが発見だった。
 - ・伝統工芸産業も農業も医療も、全て地域と深いかわりがあるからこそ存在するものだと発見した。
 - ・広島に関する様々な側面について学べたので、広島という地を多角的に見るようになった。
 - ・地域が抱える複数の問題に関する見識を深めた。実効性を見据えた解決の難しさを感じた。
 - ・自ら考えることが地域を理解する第一歩だと思った。
 - ・一方の面だけでなく様々な面から物事を捉える力を少しは身につけた。
 - ・協力することの大切さを知った。
 - ・コミュニケーションの大切さを知った。
- これらは、本科目の履修によって、得たもの、発見したものの中から、選んでみた意見である。

「広島」・「地域」に関すること、物の見方、あるいは、考えること、協力することの大切さなど、その発見や気づきは広範囲にわたっている。本科目のプログラムが、地域に関する情報の提供・フィールドワーク・グループワークを経た合同発表会（ポスターセッションでの質疑応答）といった様々な形態の組み合わせで構成されることの反映なのかもしれない。

これらのことは、次項の自らの変化の自覚にも直結していると思われる。

○自分の変化について

- ・価値観を広くもてるようになった。
- ・視野が広く様々なことに興味を持つようになった。
- ・何が課題か見極める目を手に入れた。
- ・調べたことと見聞きしたものを照らし合わせ観察ができるようになった。
- ・ニュースなどを、問題意識を持って見聞きするようになった。
- ・物事に対して積極的に学修するようになった。
- ・フィールドワークでは自分が主体的に行動しようとしたことで、自分から学んでいこうと考えられるようになった。
- ・グループで発表をする際に、自分の役割をしっかりと果たせるようになった。
- ・人とのコミュニケーションが恐くなくなった。

前項の発見と共通する事柄もあるが、価値観・視野の拡大、学修や考察への取り組み、積極性、主体性の獲得、人と協働することの重要性の自覚など、こちらも多岐にわたっている。

以上のように、受講生の内、かなりの学生が、それぞれ新しい発見や新しい力を身につけることができたと考えており、一定の成果はあるものと評価することはできるだろう。

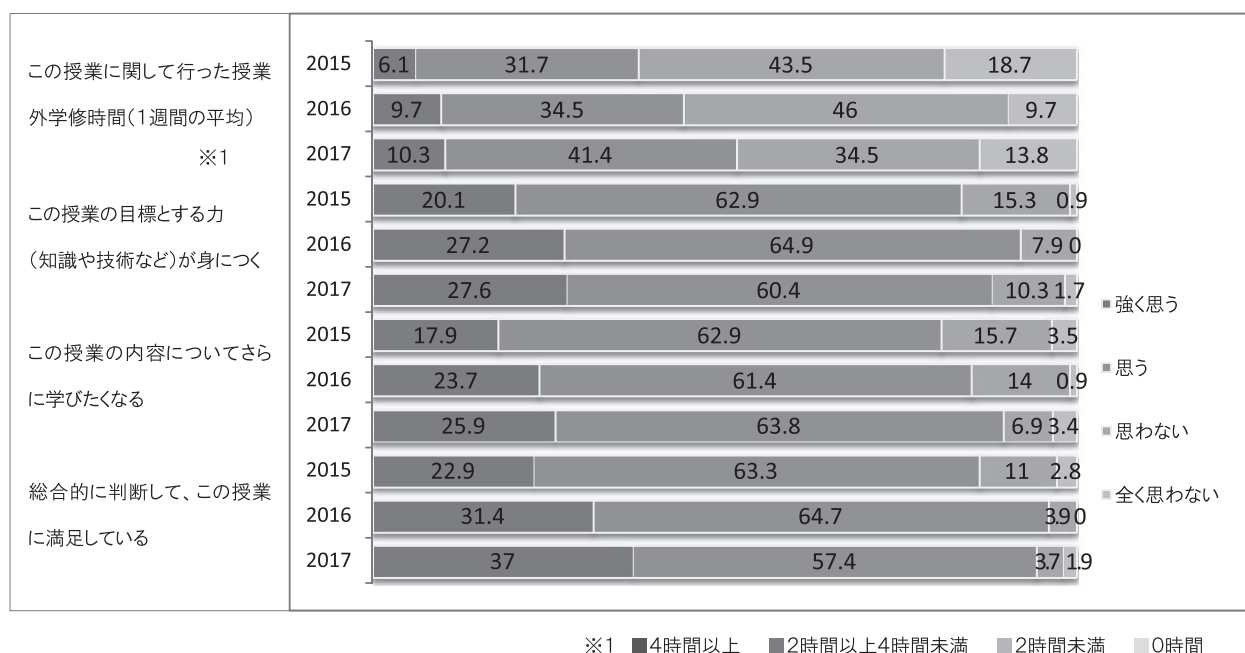
追加設問のため、消極的な意見は顕在化しにくい、「変わったのかどうかは自分ではわからないが、本当にいい体験ができた」、「変化は実感できない」、「あまり変化はなかった」等の記載も少数ではあるがあった。やはり、学生自身の取り組み姿勢に左右される面が大きいといえよう。

次に、相対的な比較とならざるを得ないが、「学生による授業評価」の9つの設問のうち、授業内容に関わる項目と授業外学修の時間について、3年間の変化を追ってみたのが、グラフ3である（85ページ）。

受講生数は、2015年度243名、2016年度117名、2017年度59名であるが、受講生数による数値の大きな変動は見られない。ただ、年度を追って、「強くそう思う」学生の割合が増え、授業外学修に時間をかける学生が増えている。徐々に、主体的に本科目のプログラムに取り組むようになってきているということの反映と捉えることは許されるであろう。

この2年間の学生の指摘には表だってはいないが、フィールドワークにかかる交通費の不公平感もぬぐえない。プログラムの提供担当者は、できるだけ3キャンパスにまたがるように依頼しているが、フィールドワーク先は必ずしも広島県内に均等に散らばっているわけではないため、庄原、三原キャンパスの学生の負担額は大きくなりがちである。交通費は原則的に本人負担とし、平均額（3,000円）を大きく上回る負担には、大学から補助を受けているが、広島市内の移動で済む学生とそうではない学生の間差が解消されるわけではない。

グラフ3 「学生による授業評価」推移（2015年度から2017年度まで）



2020年度には、学部学科の再編に伴い全学共通教育の教育課程も再び改訂されることになる。2013年度、授業改善に着手してから、計7年間の実践の検証と成果は、新たな科目の授業設計に活かされることになろう。授業改善着手の際に関係者で確認した本科目の意義「『広島』という『地域』をキーワードに、学生自らが、生活する地域に目を向け、現状を理解し、課題を考察することにより、地域に対する関心や理解を深化させる契機を提供できる」^(注4)ことを尊重しつつ、3キャンパス間の距離をどう克服するのか、新たな形の授業のあり方が模索されるべきである。

〈注〉

- 1 五條小枝子「全学共通教育『地域の理解』改善についての検討」(『県立広島大学総合教育センター紀要』第1号、2016年2月)、五條小枝子・馬本勉「全学共通教育『地域の理解』授業改善の検証と課題」(『県立広島大学総合教育センター紀要』第2号、2017年2月)
- 2 2018年度分については、成果の確認ができない時点での検証になるため、一部のデータのみを使用している。
- 3 注1 前掲拙稿
- 4 注1 前掲拙稿「全学共通教育『地域の理解』改善についての検討」